



### U-35委員会企画

#### 「設計者のしごと」

—組織で働くU-35世代と建築—

#### 活動報告

アートアンドアーキテクトフェスタ主催「U-35 Under35 Architects exhibition 2018」の関連イベントとして、U-35のこれまでの活動を紹介します。展示企画と、「設計者のしごと」と題したトーク企画を行いました。

#### U-35委員会ホームページ

HPを開設しました。

新着情報や過去の活動報告もご覧になれますので、ぜひ一度お立ち寄りください。

<http://www.aaj.or.jp/u35>

#### U-35委員会Facebookページ

活動内容やメンバーの雑感などざっくばらんに情報をアップしています。

<https://www.facebook.com/U35.aaj>



2016年より3回目となるAAFとの共同企画

2018年10月28日快晴の日曜、多くの人が行き交う大阪駅前、うめきたシップホールを会場に、アートアンドアーキテクトフェスタ (AAF) 主催「U-35 Under35 Architects exhibition 2018」の関連イベントとして、日本建築協会U-35 委員会による「展示企画」と「トーク企画」を開催した。2016年、2017年に続き、今回は3回目となる。

「展示企画」では、これまで私たちが行ってきた活動、talk baton (インプット) とaction (アウトプット) で出会った、建築と異なるさまざまなフィールドで活躍する同世代の方たちとのディスカッション、またそこから得られた成果をパネル形式で展示した。昨年行われた5th actionである第1回フューチャーセッション「建築と未来 (20年後幸せに“住まう”)」にて、多様な分野の「プラットフォームの場」創出の紹介や、U-35委員会で訪れた海外視察なども紹介することができ、来場された方々には、その幅広い活動に興味をもって見て頂けた。

「トーク企画」では、「設計者のしごと」—組織で働くU-35世代と建築—と題して、U-35委員会のメンバーのうち9名が、自ら携わったプロジェクトを通じて「設計者のしごと」について各自プレゼンテーションを行った。

単なるプロジェクト紹介に終わるのではなく、U-35世代がいかに建築と向き合っているか、私たちの日頃の姿を具体的に知ってもらえるように、それぞれの仕事のプロセスや、建築への熱い想いを中心に伝えることを、昨年同様イベント前の委員会にて課題とし強く意識した。特に昨年も学生や一般の方が多く参加するイベントであったことから、幅広い層から質問が上がるような分かりやすい各人の想いを重視した。

「トーク企画」の構成としても、設計へのアプローチや苦悩が滲み出るようなテーマ『建築と場所』、『建築と逆境』、『建築と術』の3グループに分かれ、プレゼンテーション+トークセッションの形式とした。非常に多くの方に来場して頂いた中で、熱気あふれる会場となった。



展示企画の様子

#### ■グループA『建築と場所』

- ・石井衣利子 (梓設計)  
「まちの一部になる建築」福山市総合体育館
- ・興津俊宏 (竹中工務店)  
「環境を活かす」日亜化学工業諏訪技術センター
- ・広瀬和也 (東畑建築事務所)  
「にぎわいのある場所の風景をつむぐ」宝塚ガーデンフィールズ跡地  
質問者 (学生) : 石井さんの説明の中で、もともと競馬場だったという記憶を継承する要素として楕円形と、石の階段が残っていましたが、他にも入れたかった要素はありますか？

石井 : 楕円形でもう一度つくることが、本当にいいのかわかりませんが、私にまだわからないところがあります。ただ、競馬場人がいっぱい集まっていた場所を今度は自分たちの活動の場所として、にぎわいを復活させることはできると思っています。

質問者 (一般) : 記憶の継承という時に、記憶という言葉をなんとなく言ってるような気がします。残すべき記憶は何か、競馬場の形態か、沸き立つような祝祭性か、何か言葉に置き換えればどんなことを継承することになりますか。

石井 : 本当に残すべきものは、競馬場で人がにぎわっていたという、場所の質だと思います。それがこの場所ならではなくなってほしいなと思っています。

鬼頭 (司会進行) : 土地の記憶の継承の仕方という点で、広瀬さんの作品も特徴的な形状ですが、また違うプロセスなどありますか。

広瀬 : ときににぎわいのあった場所としてその面影が残る庭園や池などが、敷地の大部分を占めていました。これらの面影を残し、それらを避けるように新施設を配置しました。その結果、特徴的な形状となっています。

#### ■グループB『建築と逆境』

- ・三谷帯介 (鹿島建設)  
「状況を味方に切り拓く」学生向けワンルームマンション
- ・宮武慎一 (安井建築設計事務所)  
「意地と喜び」神戸ポートオアシス



冒頭にU-35委員会の設立趣旨や取り組みを説明

・大畑正彦（山下設計）

「開かれることの豊さ」某斎場

質問者（一般）：宮武さんに質問です。非常に短いタイトな設計期間で、同業であればその苦しみはすごく分かるのですが、逆に施主のほうにスケジュールを延ばしてもらって働きかけはしなかったのですか。果たしてこれが正解か、150周年のシンボリックな建築も方向性としてはあったのではないかなど悩んだりしなかったかお聞きしたいです。

宮武：設計期間を延ばしてもらいたいと強く思っていました、150周年記念事業という条件から、叶いませんでした。シンボリックな案にすべきか、神戸の風土や歴史性を重視した建築とすべきか、社内ではかなり議論をしました。非常に厳しい工程と予算を鑑みて、現在の案になりました。もし設計期間があと一年あれば、違う案、例えばもっとチャレンジングな案もあったのかもしれないですが、決められた条件の中で精一杯の結果と思っています。

質問者（一般）：短時間のなかディテール含めよくやりきったなど、写真でも感じました。

#### ■グループC『建築と術』

・下田康晴（東畑建築事務所）

「開かれた木の庁舎をつくる」長門市新庁舎

・高畑貴良志（日建設計）

「デザイン最優先」京都四条高倉セントラルビル(京都ゼロゲート)

・加藤大樹（西松建設）

「空間のイメージを建築に」イオンモール徳島

質問者（一般）：巨匠建築家へ竣工した建物に、何かやり残したことがないかと尋ねたことがあります。やり残したことはいっぱいあると答えられ、いまでも自費でやり直しをしているそうです。組織で働く人間からすると、椅子から落ちそうになる話ですが、実際にはできなくても、その心構えや気持ちの粘り強さというのは、忘れず持ち続け頑張っていくたいなとグループCを聞いて思いました。

鬼頭（司会進行）：高畑さんの作品はデザイン最優先ということで、かなり突き詰めた設計

をされたと思いますが、やり残したことはありませんか。

高畑：加藤さんの説明の中で「設計者の華やかな仕事は5%、残りの95%はそれらを実現するための裏作業」という話がありました。5%とは「デザイン」そのものだと思います。「デザイン」には答えが一つではなく、他の可能性もあったので「やり残したこと」と考えることもできますね。もし問いが95%の裏作業の部分に限定されるのであれば、ベストを尽くせたので「やり残したこと」はありません。鬼頭（司会進行）：加藤さんは現場に常駐されて設計をされてましたが、通常的设计室での設計に比べて、どのような違いがありますか。加藤：商業施設では設計変更が多く、設計と施工を同時進行する状況でした。そのため設計確定後、一カ月もたらずに実物ができあがることもあり、ものづくりの実感をリアルタイムに得られることが特徴でした。

#### ■全体ディスカッション

鬼頭（司会進行）：本日の来場者は学生も多く見られますが、学生時の設計課題や卒業設計、そこから考えの延長線上で、実務へどのような影響を与えているか教えてください。

石井：学生時から継続して考えていることは、建物をこの場所で作るという課題が与えられた時に、場所や建物用途とか何かしら問題や、マイナスなことがあります。問題提起を先ずして、それを解決するために建築をつくるというところを共通して考えています。

鬼頭（司会進行）：最後にU-35委員会は、主に組織設計事務所、ゼネコン設計部と、大きな組織に属している設計者の集まりになっていますが、組織設計、ゼネコン、それぞれの立場で魅力などがあれば教えてください。

宮武：生まれ育った大阪の街をよくしたい、大学時代の神戸の街を人を元気にしたいという思いがすごくあります。庁舎や街の図書館とか公共施設を設計していきたいと思い、組織設計に就職し、その結果神戸で設計できすごく幸せに感じています。

三谷：いかに良いチームを作り一緒に走り切るかということが大事で、その点では組織設計もゼネコン設計部も大きく変わらないと思っています。設計者の職能の一つに、プロジェクトを進めるといふ推進力があると考えています。「こうだ」と考えた方針で様々な人を巻き込み、ものごとを最後まで進めるといふのは大事な役割です。組織設計で働く宮武さんのプロジェクトも、私の場合と同じように、やはりその推進力がないとできなかったことだと思います。

#### ●U-35委員会企画「設計者のしごと」を終えて

3年続けて参加させていただいた、AAF主催のこの企画はU-35委員会にとって、talkbatonやactionと異なり、自分たちの「普段の仕事」を外部に対して発表する唯一の場だ。

トークセッションは昨年までの切り口とは異なり、より若手設計者の設計へのアプローチや苦悩が滲み出るようなテーマで全く異なる3つを選んだ。

アンケートコメントでも「設計者の意地やプライドや想いが建築に反映されていることがよく分かった」、「逆境をはねのけ頑張るみなさんに感動した」、「通常でない要望に対しての解決策が大変勉強になった」、「設計する際に大切にしていることを聞いてよかった」などの意見からは、単なるプロジェクト紹介ではなく、若手設計者の設計に対する想いや三者三様のアプローチで、意図した狙いがうまく伝わったのではと思われる。

また来場者の中には、これまでのU-35委員会企画のイベントに参加された方や、学生・社会人・主婦など様々な方にご来場頂き、U-35委員会の活動目的のひとつである「プラットフォームの創出」に広がり生まれきていると実感できた。

私は昨年より委員会に参加しているが、これほどまでにたくましい同業種同世代の毅然としたプレゼンテーションが聞ける、社会に発信できるこの機会を大切にしていきたいと感じた。これからのU-35の活動に期待してもらいたい。（文責：広瀬和也）



来場者との距離が近く白熱したディスカッションを展開



来場者全員との集合写真



U-35委員会メンバー